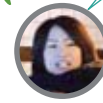


## 感想

「地域×アート×子ども」を  
キーワードにコツコツがんばります。



川那辺香乃さん

BRDGの代表(舞台芸術の公演・ワークショップ  
などを企画・実施)旧質美小学校を利用した、  
ワークショップイベントを2012年11月に開催



京丹波町は山に囲まれた地域で、四季を通じてその自然の美しさに心打たれる。春は山桜、夏は木々の緑が迫って来るように生命の力強さを感じ、秋は「山が燃える」という日本の演歌の1節を思い出さずにはられない。

京丹波町は 2005 年に丹波町、和知町、瑞穂町の三町が合併してできた町である。町のはしからはしまで行くのに、車で一時間はかかる。

そんな大きな土地ではあるが、人口は約 16,000 人と少なく、主な産業は農業と林業である。建設業の従事者も多いそうだ。

質美は JR 下山駅から車で 5 分ほどにある、山の中腹あたりにある集落である。京丹波町のちょうど中心部に位置している。

ここに、旧質美小学校がある。昨年 3 月に廃校になったばかりの小学校である。現在は地元の方（質美地域振興会）が自主的に活動できるコミュニティスペースとして今年の 4 月より運営している。

中には、質美に住んでいる谷文絵さんが経営する絵本屋さん「絵本ちゃん」をはじめ、パソコン教室や英語教室、おやじバンドなど、空いている教室を使って自主的に活動をされておられる。



谷さんは高校3年生の息子さんがおられる。

お子さんが小学校1年生の入学時に、ご主人の実家である質美にUターンしてきた。当時はまだ質美小学校はあり、

「この学校に子どもを入学させたい、この自然あふれる場所で育てたい」と決心されたそう。

しかし、どんどんと質美は衰退、ガソリンスタンドや売店がなくなっていく中、廃校も決まり、「このまま放ってはいけな」と決心し、地元の人だけでなくいろんな所から人が集まってくるようにと絵本ちゃんを始められた。

さらに、谷さんは絵本が気軽に読める「きのこ文庫」というスペースを「絵本ちゃん」の隣の教室に設けた。

「京丹波町は高齢化には目を向けていて、老人ホームやデイサービス、サロンなどお年寄りが集まる場所は多い。

けれど子育てをするお母さんや子どもがゆっくり過ごせる場所は少ないのが現状。私も子どもを育てている中でそういった場所があればいいのと思っていた。なので、ここはそういう場所にしていきたい」と谷さん。

絵本ちゃんを皮切りに、カフェをオープンする方も出てきて、訪れた人の憩いの場としても機能し始めている。

カフェは地元のおかあさん達が運営している「喫茶ランチルーム」が第一・第三土曜日、質美にUターンをして7年目の家具職人の上田ご夫妻が運営している「423（しつみ）カフェ」が第二・第四土曜日にそれぞれ営業している。喫茶ランチルームはカレーライス（サラダバー付き 500円）、423カフェは京丹波で獲れた野菜を中心としたロップインランチ（6種類のおかずとスープ、上田ご夫妻手作りのお米 1200円）がそれぞれオススメランチである。

また、最近「風土木（ふどき）」というきまぐれカフェもオープン。こちらもUターン移住者の浅田さんが運営されている。陶芸家のご主人が作った食器に彩られた食事の数々は、どれも美しい優しい味がする。

また、この11月は毎週土曜日に小学生を対象とした、『サタデーアートワークショップ in 京丹波』が開催された。

「京丹波 × アート × 子ども」をテーマに、京都市内を中心に活動している演劇・ダンス・音楽のアーティスト達を講師に招き、京丹波町の自然あふれる場所、さらに木造の温かみのある校舎でワークショップを行った。参加した子どもは各回8～10人程度で、京丹波町内の子どもが多かった。遠方では園部、美山、亀岡からの参加者がいた。

アートと質美の環境の良さが相乗効果となり、最初は緊張していた子ども達も次第に目が輝きだし、感性や想像力がぐんぐんと開いている様子が見受けられた。例えば、17日に実施した音楽のワークショップでは「質美の音で遊ぼう」と題し、子ども達にレコーダーを持たせ、質美に潜む音をレコーディングしてもらった。子どもたちは声や足音だけでなく、雨や風などの自然の音や、ボールを蹴る音、引き出しを出し入れする音など学校内を探検して音を探しに行き、アーティストも驚くような音の数々を収穫してきた。最後はみんなが各自でレコーディングした音と、音楽室にあった楽器を使って質美でしか作れない音楽を奏でた。(講師：中川裕貴・山崎昭典)



都会に比べ、こうしたワークショップの機会は少ないため、参加した保護者の方からぜひ今後も続けていってほしいとお声を頂いた。実施した側としても、質美でこうしたワークショップを行うことは価値があり、子ども達がこの場でなにかを発見し作り上げていくことがコミュニケーション能力やセンス・オブ・ワンダーの向上の一助になるという確信を得た。

一方で、やはり子ども達を通して地域の課題が見えてきた。

統廃合が進んでいる京丹波町では、1つの学校にスクールバスで遠い所から子ども達が集められ、帰る時も一斉下校を与儀なくされているケースがある。

放課後は保護者に送迎を頼まなければ、友達の家へ遊びに行けないのが現だ。そのため、今回のワークショップも、もしかしたら子ども達の中には行きたくても保護者の都合で参加できなかったケースもあるのではないかと考えている。

今後は学校関係者ともつながりを持ち、こうした課題を少しでも解消できればと考えている。また、意外なことに今回のワークショップでは、田舎でよく期待しがちな子ども達のコミュニティ（年齢が上の子どもが下の子どもの面倒を見る、といった異年齢同士の子どもの交流）が見受けられなかった。それぞれの子どもが自分たちの個性を主張しすぎているように感じ、みんなで助け合っただけでなにかを作り上げるといった協調性があまり見られなかった。ただ、ワークショッププログラム自体も、子どもの個性を伸ばすことを目的にしていたため、第三回以降からはアーティストにグループワークを少し取り入れてもらうように呼びかけ、さらに質美に住む中学・高校生にボランティアスタッフとしてワークショップの中に入ってもらうことで異年齢交流もテーマに加えた。もともと旧質美小学校は昔から1学年1クラスの小さな学校で、給食などは全学年でごはんを食べるなど、みんなが協力して毎日学校生活を送っていた。廃校となってしまったが、その一人一人を思い合う校風をこのワークショップでも織り交ぜていければと考えている。

京丹波町は、京都市内から車で約1時間半。それほど遠い場所ではない。都会の喧騒から逃れ、一日ゆったりとした時間の中で過ごすにはぴったりだと思う。

また、こうした旧質美小学校の取り組みが外側からではなく地元の人から内発的に始まったものであることは特に強調しておきたい。サタデーアートワークショップ in 京丹波は外側からの持ち込み企画ではあったが、地元の方の活動がなければスムーズな実施に至らなかった。まだまだ世代間の地域活性化に対する考え方の違いなど課題は残っているが、スモールスタート・サスティナブルな活用方法を模索しており、今後もこの場を拠点にしながら地域を見つめていきたい。

